**史跡　垣ノ島遺跡**

北海道南部の函館にある垣ノ島遺跡は、紀元前7000年頃に遡る遺跡です。発掘作業により、先史時代の6000年を超える期間にわたる出土品、墓穴、竪穴建物跡の証拠が見つかりました。これらの発見は、先史時代の日本の暮らしに関する知見を提供し、社会的・文化的・精神的な発展の証拠を供与してくれます。この遺跡に隣接する函館市縄文文化交流センター [リンク] は、垣ノ島遺跡からの出土品を展示しており、先史時代の日本の世界について総合的な紹介を行っています。

*葬儀と埋葬の慣習の発達*

葬儀と埋葬の慣習は、縄文時代（紀元前13,000年～紀元前400年）の間に大きく発達しました。集落は、紀元前7000年頃より、居住地から離れたところに墓地を配置するようになりました。垣ノ島遺跡では、居住地と墓地が別々に見つかっています。この遺跡で発見された最初期の墓穴の一部は、紀元前5000年～4500年のものです。

*珍しい副葬品*

垣ノ島遺跡の墓穴には、足形のある土版など、幅広い副葬品が納められています。紀元前5000年～4500年頃の形と大きさはさまざまですが、すべてに縄の文様があり、1～2個の足形がつけられています。足形は6～18cmで、おそらく子どものものでしょう。逆の面に手形がつけられている土版もあります。

*U字型の盛土*

この遺跡では、大きなU字型の盛土が見える状態になっています。ここには大量の陶器、石器、動物の骨の破片があります。この盛土の一部からの出土品の一部と土壌は、焦げた物質の証拠を示しており、ここで火が燃やされた可能性があることが示唆されています。考古学者たちは、盛土の一隅の地面に掘られた溝を発見しました。これはU字型の中央部分に至る道である、と考えられています。また考古学者たちは、U字型の盛土の中央部分に、石棒・剣などの祭祀の道具を含む小さな塚を見つけました。この盛土では、葬儀などの儀式が行われ、供物が捧げられていたと考えられています。

この盛土は紀元前3000年頃まで遡ります。おそらく、数百年をかけて築かれたのでしょう。長さは190mを超え、幅は120mあります。高さは、一番高いところで2mに達します。

*土器*

垣ノ島遺跡では、実に幅広い土器が発見されています。最初期の例は、底部が尖っている土器であり、土に貝殻を押しつけた模様があります。さらに時代が進むと、凝った装飾の漆塗り注口土器や、多くの穴がある香炉のような形の複雑に作られた土器が現れます。これらの製作物は、意匠の感覚が高度に発達していたことや、焼き物の進んだ技術に通じていたことを示しています。

*函館市縄文文化交流センター*

函館市縄文文化交流センター [リンク] には、垣ノ島遺跡、大船遺跡 [リンク]（車で10分）、およびこの地域の他の遺跡からの出土品が展示されています。最も高く評価されている出土品は、「中空土偶」です。この土偶は、野菜畑を耕していた女性によって発見されました。この土偶は、複雑なデザイン、光沢のある仕上がり、細かな模様、および保存状態が優れていることで、考古学者や美術史家から称賛されています。この土偶は日本の国宝として指定されており、東京国立博物館、大英博物館（British Museum）、スミソニアン博物館（Smithsonian Institution）など世界中の一流博物館で展示されてきました。

函館市縄文文化交流センターには、展示に加えて体験メニューもあり、編み物や土器など、先史時代のものづくりに挑戦することができます。センターへの入館には少額の料金が必要です。情報は英語でも提供されています。

*関連遺跡*

大船遺跡 [リンク] は、垣ノ島遺跡から車で10分のところにあります。この遺跡では大規模な集落の証拠が発見されており、大きな竪穴建物跡の基礎を垣間見ることができます。北海道の他の遺跡には、大型の貝塚が発見された入江・高砂貝塚 [リンク] や北黄金貝塚、札幌の近くにあるキウス周堤墓群 [リンク] があります。